

# 日本国際情報学会通心

PHILOSOPHY

— 人間科学特集 —

## 目次

- |                                    |          |
|------------------------------------|----------|
| 【1】 ごあいさつ                          | 会長 近藤 大博 |
| 【2】 無情の壁と、壁の無常と<br>—ひとつの「歴史哲学」的断想— | 佐々木 健    |
| 【3】 『千年の愉楽』——人倫不在の物語               | 岡本 由実子   |
| 【4】 時代を超える言葉                       | 柏田 三千代   |
| 【5】 あるファンタジー物語より                   | 川原 有加    |
| 【6】 人生を豊かにする哲学                     | 苑田 純子    |
| 【7】 経験のあり方を変える                     | 坊農 豊彦    |
| 【8】 事務局からのお知らせ                     |          |
| 【9】 編集委員からのお知らせ                    |          |
| 【10】 編集後記                          |          |



## ごあいさつ

当学会は、昨2009年7月23日に日本学術会議より協力学術研究団体として承認されたこともあり、研究部会などの活動を活性化させております。2010年度は、神奈川県湯河原で始まり、関西地方研究会(7月3日)、東京(10月2日)と続きます。それら活動の集大成として、11月27日には総会・研究発表会を東京(市ヶ谷・日大会館)にて開きます。一人でも多くの方のご参集をと願っています。

学会の動向、会員各位の熱心な活動を互いに身近にすることが、研究・活動のさらなる活性化につながるものと確信しています。ニュースレターの役割大です。他と同様、ニュースレターにも大いに力を注いで参ります。その成果の一端をここにお届けします。

会長 近藤 大博

## 日本国際情報学会通心

無情の壁と、壁の無常と  
—ひとつの「歴史哲学」的断想—

思想史研究家 佐々木 健

壁があれば自由な活動は阻害される。壁は生活を抑圧する。壁がなくなれば、束縛から解放される。だが同時に、今度は資本の自由な流入によって生活が根底から脅かされる。自由であることの高価な代償を払わなければならない。生活の安定のためには、壁があったときのほうがよかった。あればあったで不自由である。なければならないで、あった頃の生活のほうがよかったのではないかと、昔を懐かしむ。どちらの場合にも、等しく悩みはつきまとう。

壁——第2次世界大戦後の東西冷戦体制下に構築された壁、東西に分割される以前のドイツのかつての首都、分割下の東ドイツの首都、そのベルリンを二つに分かっていた壁。

2009年11月9日、その壁崩壊の20周年を迎えた。1989年11月9日に壁は打倒され打ち壊された。さらにその20年前にあたる1969年の7月、筆者はイギリス留学の帰路、ベルリンを訪れたことがある。（前年の8月、当時のソ連および東欧5ヶ国の連合軍がチェコのプラハに侵攻して、「プラハの春」以来の民主化運動のうねりの高まりを踏みにじった。その11ヵ月後のことであった。ベルリンの次の訪問地はプラハであった。）

壁のそばに立った時、壁の向こう側（つまり東地区）を見られる展望台風の檣に登った時、この壁は未来永劫に存続するかのようには思われた。鷗外のあの『舞姫』に出てくるウンテル・デン・リンデン通りも、かつて哲学者H教授が教壇に立ち総長を務め、今はロンドンに眠るM君が学んだあのベルリン大学（別名フンボルト大学）も、壁の向こうに永遠に消え去るようには感じられた。あの堅固そうな様子を見れば、そのように推測しても何のおかしさもなかったであろう。

反面、あの体制を支えていた「精神」のあり方に想いをいたす時、「これはあかん！」と考えざるをえない状況もあった。観光バスで訪れた東地区のあるホテルのトイレに入った時のことである。洗面所の壁に懸けられた鏡の表面が微妙に歪んでいるのである。鏡は通常、自分の顔を映して、自分がどんな健康状態にあるかを日常的にチェックする手段となるであろう。自分がどうであるかを自覚する手掛かり、自分の実際の姿を映し出す、自己認識の通路となるものである。その鏡が歪んでいては話にならない。体制自身が自分の実相を把握する途を、はじめから遮断されていたのである。

それから、こう言えば当事者には酷かもしれないけれども——この世において、またこの世の歴史において、すべての人間が当事者であらざるをえず、局外者や傍観者ではありえない存在論的基盤を見失ってはならない——この世において永遠に持続するものは何物もないのである。いかなるものも、変化・転換・変質、消滅・死滅・崩壊・解体等々を免れない。このことにひとつの例外も存在しない。社会主義体制を永遠に護る壁など、そもそもの初めから存在するはずがなかったのである。



## 『千年の愉楽』——人倫不在の物語

岡本 由実子

中上健次の代表作の一つ『千年の愉楽』は、中上が作り出した被差別の虚構空間である「路地」を舞台として、そこに生まれ育った、高貴にして澱み穢れた血を持つ中本の一統の若衆6人をそれぞれ主人公とした6篇からなるオムニバスで、老産婆オリユウノオバが語り手を務める。彼らの生き様・死に様を、路地の過去と現在のみならず未来にいたるまであらゆることを知り尽くしたオリユウノオバが、とりとめもなく語る。まるで神話のような物語である。

秀でて美しい容貌を持つ主人公たちは、中本の一統の宿命ゆえに若くして命の絶頂を迎えるのだが、その短い一生の間に彼らが為すことといえば、酒・博打に明け暮れ、ヒロポンにおぼれ、女をだまし、動物のように情交にふけり、盗み、刃傷、殺人と悪行を重ねていく、というように悪行三昧である。そして、そのような人生を悔いるかということそうでもない。例えば「六道の辻」の三好の場合、情婦の夫を殺した後、オリユウノオバに「人、殺しても何にも変わらんねえ」と言った。人倫不在の世界なのである。

これに対してオリユウノオバは、「人を殺しても悪かったと思わない三好は罪に気づかないだけ無垢で、(中略)三好に罪はなかった」と考える。三好に限らず、どの主人公の悪行に対しても、オリユウノオバは責めるということがない。

確かに世間の親らのようにオリユウノオバには人の物を盗んではいけない、人を殺めてもいけない、殺傷してもいけない、という道徳はあたうる限りない。何をやってもよい、そこにお前があるだけでよいといつも思ったし、礼如さんと暮らし続けて仏につかえる道は何もかもをそうだったと肯い得心する事だと思っていたので、(後略)

礼如さんというのは、オリユウノオバの夫で毛坊主(有髪で半僧半俗の人。真宗寺院のない農村などで、葬儀・年忌の際に僧の役をする)である。オリユウノオバの道徳観(非道徳観?)は、その影響によると考えられる。しかし、物語全体を覆う人倫の欠如は、それでは説明しきれない。

ここで、主人公たちが短命であるという点に立ち返ってみたい。宿命的に短命ということは、それだけ彼らが死者の世界に近い存在であるということの意味する。オリユウノオバもしばしば彼らのことを「この世の者とも思われぬ」「この世でない別の世」の存在であると語った。吉本隆明は、この作品世界について「死者の世界と『路地』の世界のふたつを一体として包みこんだ大きな規模の世界であるため、現世だけの規模の倫理に反しても、すこしも糾弾されることはない」としている。

オリユウノオバの言う「この世でない別の世」、吉本の言う「死者の世界」とは、異界、他界、あるいは常世と呼ばれるもの、つまり“向こう側”であり、主人公たちは“向こう側”と“こちら側”の境界を越えて、ひと時“こちら側”にやってきたのである。中上は“向こう側”を「非定住」或いは「反定住」と考えていた。“こちら側”にあるべき定住を否定し、安住を齎かし、社会を揺さぶるものなのである。つまり、主人公たちは、“向こう側”から来た存在であるが故に、人倫を越えていくように定められている、ともいえるのではないだろうか。

中上は、何故このような人倫不在の世界を描いたのだろうか。このような世界にどのような発見をしたのだろうか。『千年の愉楽』は、“こちら側”で安穩としている私を挑発して止まず、興味の尽きない物語である。

## 日本国際情報学会 通心

## 時代を超える言葉

柏田 三千代

私たちは言葉を日常のコミュニケーションツールとして用いている。「木」や「火」など人類が言葉を用いるようになったことで、人々は対象を分類認識できるようになった。また、その分類認識された言葉、すなわち社会で共通する認識によって、人々は物を作り、思想を伝え、社会が発展し、現代へと発展・進化し続けてきたのである。

歴史を知ることができるようになったのも、言葉を用いたことによって可能となったのである。歴史で語られる世界は異次元空間のようでもあり、登場する人物はまるで私たちとは違う人間のようにも感じ取れる。しかし、たとえば世界の名言が集約されている「名言集」という書籍を読むと、遙か昔の時代に生きた人々の語られる言葉は、現代に生きる私たちにとっても共感が持てる言葉である。また、その言葉は時代を超えた人々を身近に感じ取れる瞬間でもある。では、私たちが時代を超えた人々の言葉に共感を持つということは、社会は移り変わり発展・進化しても、人間の感性は変わらないのだろうかということである。人間は日々の経験から知識を増し、成長する。また、子供の頃共感できなかったことでも、大人になれば共感できることもある。共感というのは、他人の考えや感情をその通りだと感じることである。

そこで、思考という言葉切り離して考えると、「思」という思う個人の内面から湧き出る感情というのは、対象による事象であるため発展・進化しないように思われる。したがって、「うれしい」「愛おしい」「悲しい」「苦しい」などの感情は、発展・進化しないため、感情を表す言葉も発展・進化せず、遙か昔の言葉が現代においても共感を生むのかもしれない。しかし、人間は「考」という考えることで物を作り、生活を豊かにさせ、また思想を繰り広げて社会は変革していく。すなわち、発展・進化しているということになる。では、「考」が発展・進化していても人々が時代を超えた言葉に共感するのは何故だろうか。時代と共に発展・進化すれば、当然昔の言葉は古く感じられる。「考」も古ければいつしか捨てさられ、無くなってしまおうだろう。しかし、その言葉が正論であれば、どれほどの時代が流れようとも人々の共感をよび、言葉は生き続けるのではないだろうか。



## 日本国際情報学会通心

## あるファンタジー物語より

川原 有加

イギリスの作家C. S. ルイス(Clive Staple Lewis, 1898-1963)の代表作の一つであるファンタジー作品『ナルニア国年代記物語』(*The Chronicles of Narina*, 1950-1956)の最終作、第7巻『さいごの戦い』(*The Last Battle*, 1956)に次のような一節がある。

みなさんが、窓の一つある部屋にいて、その窓から美しい入江か、山々のあいだにつづく緑の谷間が見えるとしましよう。そして、その窓と反対がわの壁に、鏡がかかっているとします。もしみなさんが窓からふりむいて、ふと、その鏡のなかに、まったく同じ入江なり谷間なりを目にしたら、どうでしょう。鏡のなかの海、鏡のなかの谷は、あるいは、ほんとうの海や谷と同じものです。けれどもそれとともに、どこかちがうものなのです。(C. S. ルイス『さいごの戦い』瀬田貞二訳、岩波書店、2000年(新版)、285ページ。)

これは、子どもたちが疎開先の屋敷の主人の大学教授に出会い、彼らが今いる場所の説明を受けた後の描写で、語り手が読者にさらにこの例えを挙げている。そして物語はクライマックスを迎える。実は子どもたちは列車事故に遭い、真のナルニア国(=天国)に入っていたのである。

この一節は、古代ギリシアの哲学者プラトン(B. C. 428/7-B. C. 348/7)の『国家』第7巻にある「洞窟の比喩」が基になっていることを連想させる。「洞窟の比喩」を簡単にまとめると次のようになる。子どもの頃から洞窟の中で手足と首を縛られて住んでいる囚人たちがいて、背後から火が灯り、彼らと火の間に城壁のようなものがある。彼らはそこから前方の壁面に映し出される影絵しか見ることができないので、その影絵を實在のものだと思い込む。しかし、洞窟から外に出ると、太陽の光が照らす本当のものが存在する世界へ至るのである。さらに、現実世界が影絵ではないと思えるようになるまでには、段階を追った長い訓練(学び続けること)が必要である。

ルイスが物語の重大な場面に「洞窟の比喩」を取り上げているのは、ルイスがプラトンをいかに重要視していたかということが伺える。

まず、ルイスの概念とプラトンの思想との合致。『ナルニア国年代記物語』は、ルイスが自らの言いたいことを子どもたちにも分かるようにファンタジー形式にて書かれた唯一の子ども向けの作品である。『ナルニア国年代記物語』は、子どもたちの死というやや衝撃的な結末を迎える。この場面はその核心となる箇所であり、ルイスの世界観が十分に注がれている。「洞窟の比喩」では、洞窟の中の囚人という暗い印象を与えるが、『さいごの戦い』では、プラトンの思想のみをうまく取り入れ、美しい情景を例にして丁寧に説明を加えることで、子どもたちにとって死後の世界である美しい天国の世界の想像を助けたり、死への恐怖を和らげているのではないだろうか。

そして、当時のイギリスの教育批判。物語の中で子どもたちが出会う大学教授は、「ギリシアのすぐれた哲学者プラトンの本に出ているが」と明言し、彼らがプラトンについて学習をしてないことを批判している。ルイスも自ら大学で教鞭をとっており、子どもたちと出会う大学教授は、ルイス自身に最も近い登場人物であると言える。子どもたちが目にして状況を大学教授の口から説明しているのは、ルイスから子どもたちへの助言の意味が含まれている。この箇所を読むと、私自身にも子どもの時にプラトンについて学習したかという問いかけがなされているように感じる。答えは残念ながら「ノー」である(他の哲学者に関しても同様であるが)。結局、これは現代の子どもたちにも当てはまっていると思われる。何かと便利になり、洞窟の中だけで事足りることもある現代社会。そこで影絵だけを見ているのではなく、様々なことを考え、広い視野を持つことを忘れてはいけない。その先にある本当の美しい景色を見るために。ルイスやプラトンの思いと違う方向に行き着いているかもしれないが、いろいろなことが思い浮かんだ一節である。

<参考文献>C. S. ルイス『さいごの戦い』瀬田貞二訳、岩波書店、2000年(新版)。  
プラトン『国家』(下)藤沢令夫訳、岩波書店、1979年。



## 日本国際情報学会 通心

## 人生を豊かにする哲学

苑田 純子

哲学というと、とても堅苦しいイメージがあるけれど、実はそうではないと思っている。私は、哲学は先人の知であり、もっと私たちの身近に存在し、生活に活かせるものであると考えている。なぜなら、哲学はギリシアにおいて、知恵を愛し求めることから始まり、その当時の生活の中から生まれた知識・知恵、経験や観察から生まれたものだからだ。高校生のころ、ソクラテスの「無知の知」という言葉を知り、この言葉をもじり、「無知の無知」、「知の知」、「無知の知」というように友人と絵に描いて遊んでいた。私は、後にこの言葉の奥深さを知ることになった。

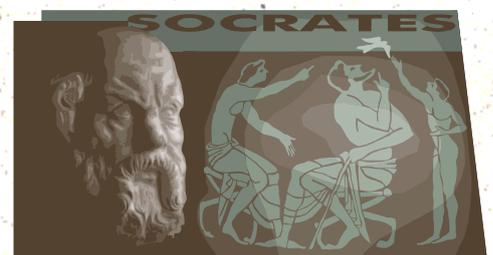
●「無知の知」：ソクラテスは利益や名誉を愛し求めるよりも、むしろ魂が善くあるように求め、その「善さ」とは何であるかを求める活動を行った。この問いかけのうちに、ソクラテスの新しさ、偉大さがある。当時のポリスに出現した職業的教育者であるソフィスト(元来は知識・知恵のある人の意味であった)が説く知識の実用性に対抗して、君たちは何を知っているのか、何も知らないではないか、と批判した。「自分は何も知らない」ということに気づき、「無知」を自覚しなければならない。「無知の知」こそが本当の人生の知恵の出発点であると主張した。人間は「善さ」を求めて活動をしているが、その「善さ」そのものを知っているのかということである。

高校生の私は、自分が知らない、理解していないということを知っているかどうかだと考えた。ことわざで「人のふり見てわがふり直せ」という言葉を思い出し、先人の知恵を見習ってみようと考えた。当時の私は、勉強をする時に本当にこの事について私は知っているのかという疑問を抱くようになった。そこで、「調べる」という事を行い、自分は何を知らないのかということを探求するようにした。

様々な書物に触れ、一見関係ないような分野も「知る」事で、そういえばこんな事もあったというように、学んだことが繋がっていくのである。例えば、国が違い遠く離れているのに、ある宗教の神話や伝説が、別の宗教の神話や伝説と類似していることがある。地理で大陸プレートが移動して、ハワイ諸島が少しずつ日本に近づいていることから、昔は陸が繋がっており、伝搬されたのではないかと等様々な考えが浮かび、知る事が楽しくなった。

また、学問や思想だけではなく、生活の中で、知らなかったために損をする事がたくさんあった。例えば、奨学金制度を知らなかった私は、家庭の事情で大学に行くのをあきらめた。もし進路を決める時に知っていたら、あきらめることもなかったであろう。様々な事を知るうちに、今までの自分は、「無知の無知」だったということを知り、今まで無為に過ごしてきた自分を自覚し衝撃を受けた。このように、自分が知らない事を知るようにしていくことができれば、世界は変わるのである。

今回ソクラテスを例に挙げたが、ソクラテス是对話を通じて相手の持つ考え方に疑問を投げかける「問答法」により哲学を展開した。その方法は自分ではなく相手が知識を作り出すことを助けるということで「産婆術」と呼ばれている。今まで述べてきた事を振り返ると、私は時代を越えて、ソクラテスから「産婆術」を受けていたのかもしれない。そう考えると、表題に掲げたように「人生を豊かに」という場合、そもそも「人生の豊かさ」とは何なのか、を根本から問い、この問いかけの営みを、日常生活の中から一步一步着実に、あきらめずに、辛抱強く推し進めていくことが、ソクラテスの偉大さを感じ、哲学の素晴らしさを感じることにつながるのではないかと考えるのである。



## 経験のあり方を変える

坊農 豊彦

以前から、オートポイエーシス論について調べている。オートポイエーシス論とは生命システムの本質に迫る概念である。その概要は、本学会2008年度論文の研究ノートで紹介した。このシステム論を提唱した生物学者のウンベルト・マトウラーナとフランシスコ・バレーラの著書を、軽く読んでも、なかなかイメージがわからない、非常に難解なシステム論である。

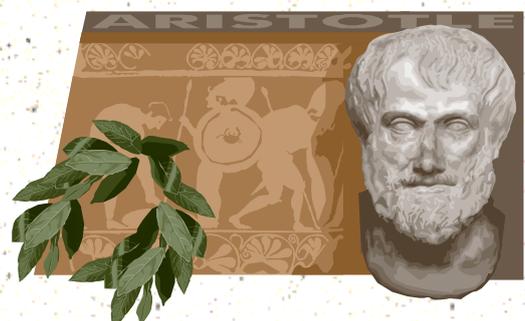
著書では、パイロットの隠喩が紹介されている。パイロットは夜間飛行という難関な離着陸を成し遂げ、観察者から喝さいを浴びるが当惑する。パイロットにしてみれば、闇夜の空で無事に目的地までたどり着くという離れ業をしたわけでもなく、操縦席の計器を見ながら状況に応じて操作を継続しているだけなのである。ここで重要なのは、当事者であるパイロットに起きている経験と観察者が外から見ている経験の認識に差異が生じていることである。オートポイエーシス的には、パイロットは自ら起きている経験の中で自己領域を形成し続けるのである。神経システムも同様に、自らが外部世界と関連付けて作動しているのではないと著者は唱えている。

次に建築の隠喩を紹介する。いま、26人の職人を集めて2つのグループ(13人)に分けて家を建てることにする。一方のグループでは管理者である棟梁がいて、設計図に基づいて当初想定に沿って家を作る。それに対して、もう一方のグループは管理者をおかずに、職人相互がどう振舞うだけで家を建てることにする。その場合でも家は出来るのである。なので、どんな家が出来るか、完成したことすらわからない。それでも家は出来てしまう。それは、職人が相互の振舞いから、おのずと持ち場を決めて自動的な建築行為が継承されて家が建つのである。このさいの職人たちの相互の振舞いを決めているのがオートポイエーシスの産出プロセスの原イメージである。

ここで著書からオートポイエーシスの定義を確認する。オートポイエーシス的システムとは、(1)構成要素の相互作用と変換とを通じて、構成要素を生み出した過程(関係)のネットワークを持続的に再生成し実現する。(2)構成要素が存在する空間内で具体的な実体としてシステムを構成するが、それは、ネットワークとしてシステムが実現する位相(topological)な領域を指定することによってである。

ここまでくれば理解する気力が遠のく。オートポイエーシスの定義とオートポイエーシスの産出プロセスを結びつけ、定式化するには非常に困難である。まずは、これまでの経験のあり方を変えて考えなければならない理論構想なのであろう。

<参考文献>河本英夫『オートポイエーシス2001』新曜出版、2001年1月(初版)



## 日本国際情報学会 通心

## 事務局からのお知らせ

## 1. 『国際情報研究』第六号のCD版発送

遅れております、2009年度、日本国際情報学会誌『国際情報研究』第六号のCD版を4月末より会員各位に郵送にて配布しております。遅くなりまして大変申し訳ございません。

## 2. 2010年度の会費納入をお願い

まだ、納入を済まされておられない方は、よろしくお願い申し上げます。

入金方法等はこちらまで <http://gssc.jp/siss/gosira2010a.htm>

## 3. 役員的人事異動

4月1日付けで大阪経済大学の清水利宏氏が理事に就任されました。

4月1日の役員表 <http://gssc.jp/siss/grijisyo.htm>

## 4. 2010年度、関西地方研究会(兵庫県西宮市)の案内

皆様のご参加をお待ちしております。

【日程】平成22年7月3日(土) AM10:00-17:30 予定

【場所】大手前大学 さくら夙川キャンパス 本館 教室A23

【概要】地方研究発表会ということで、地域情報発信に視点を当て学術研究を行います。

【内容】特別講演(部外)、研究発表(学会員)、特別研究発表(部外)の3セッション

## ◎ 特別講演

『ローカルパーティ「大阪維新の会」と大阪都構想について』 10:00-11:00  
大阪経済法科大学客員教授 松室 猛氏

「元気な地域にはワケがある——長野県小布施町・内子市五十崎町などの事例から」(仮題) 11:00-12:00  
財団法人関西情報・産業活性化センター 情報化推進グループ参事補 平塚 伸治氏

「AGORAはひろば=ひと・もの・ところをつなぐ地域情報紙」 13:00-14:00  
京阪ジャーナル社 月刊 AGORA 編集長: 安里 他恵子氏

## ◎ 研究発表

近代日本文化史探訪 「神戸発、松方幸次郎の夢」 14:00-14:40  
大手前アートセンター(大手前大学) 戸村 知子氏

「まんが王国とっとり」の潜在能力(仮題) 14:40-15:20  
鳥取県 中部総合事務所 福祉保健局 勢川 洋之氏

中国遼東半島-子規の思いに馳せる(仮題) 15:30-16:10  
大阪電気通信大学高等学校 教諭 木佐貫 洋氏

地方議会の変化-見直しされる様々な制度について- 16:10-16:50  
京都府議会議員 安田 守氏

(順不同)

詳細/参加申し込みは、こちらから <http://gssc.jp/siss/gosira2010b.htm> 実行委員 坊農、戸村

## 日本国際情報学会通心

### 編集委員会からのお知らせ

#### ◎学会論文募集

平成22年度、日本国際情報学会誌『国際情報研究』第7号の論文募集をいたします。  
投稿規定、募集要項は6月1日にメーリングリスト、ホームページにて公表します。

論文集に関する問合わせ先 edcom-work<a>gssc.jp <a> → @ に変更してください。

### 編集後記

☆+.....+☆

21年度よりニュースレターを発行しておりますが、今年度は、わたしが編集担当になりました。  
今年のトピックは各ジャンルに分けて特集号として発行します。まずは「人間科学」の特集号  
として、お届けいたします。また、学会皆様からの寄稿も大歓迎です。

編集、発行担当 坊農豊彦

